

Constance Hill Hall: *Incest in Faulkner—A Metaphor for the Fall*

平野 信行

1983年にアメリカの全国ネットワークのテレビ局が父娘相姦をテーマとする番組を放映したところ、視聴者から大変な反響があった。アメリカのテレビに出てくるCMにchild abuseに関するものがある。大人の女性がベビー服を着て赤ん坊の格好で登場し、自分で頬を叩いたり耳を引張ったりするコミカルなもので、最後に、このようなことがあったら、これこれの番号に電話するようという案内がある。要するに子供に対する大人の側からのいじめへの警告であるが、問題はchild abuseの内容である。殴ったり引張ったりならまだいい。じつはabuseの中のかなりの割合を親子相姦（とくに父娘相姦）が占めている。このことについては、現在文学作品に扱われたり、話題になったりすることが多いから、アメリカ人にとって事新しくはないであろう。しかし、それがドラマ化され、映像となって目の前に映し出されては、受ける衝撃は大きいものと思われる。

一方、フォークナーがすぐれた作品を次々に公にしていた1920年代終りから1930年代中頃を中心とし、およそ今世紀前半までは、近親相姦の行為はもとより、これを云々することすらタブーであった。にもかかわらず、彼の作品の多くに、直接的にせよ間接的にせよ、敢えてこのタブーに言及した個所が数多くある。その理由は何か、著者の執筆動機はそこにある。

本書はMichigan州AnnArborにあるUniversity Microfilms Internationalから出ている“Studies in Modern Literature”というシリーズの55番目のものである。AnnArborといえば、University of Michiganの所在地であり、この大学はフォークナー研究の泰斗 Joseph Blotner 教授を擁するだけあって、本シリーズにはフォークナー研究に関するものがすでに7点あり、本書は8番目に刊行されたものである。

著者は、何故フォークナーが当時タブー視されていた近親相姦に挑戦したのかという問題を解明するにあたって、主要作品として *Flags in the Dust*, *The Sound and the Fury*, *Absalom, Absalom!* の三つを検討の対象に選んでいるが、これらの内容を分析するのみならず、可能な限り他の作品に見られる近親相姦に関わる記述にも言及することによって、考察の主たる対象としている三つの作品の、当該テーマに関する重要性をより鮮明に示そうとする。そればかりではない。著者は、執筆当時嫌悪あるいは恐怖の眼で見られていた近親相姦という主題を、何故フォークナーが執ように追い続けたのかという問題の解答は、単なる作品相互の比較考察のみでは得られないという立場から、検討の範囲をより広げ、人類学、心理学、歴史、文学（アメリカ文学以外の）を材料として、著者自身の提起した問題に答えようとする。この作業は当然多くの文献を渉漁することになるから、選ばれた主要作品の分析にあたって加えられる注釈が多い。127頁から成る本書のうち、約21頁をnotesが占めている。ほぼ2割である。この程度の頁数の書物でnotesが約2割というのはやはり多いといわねばなるまい。たとえば、約15頁のIntroductionに対して付けられているnotesが45箇所である。これを多すぎるとみるか妥当と考えるかは内容いかんによる。本書全体に付されたnotesを

みると、引用個所にこれこれの文献の何頁とのみ記されているところは数少なく、大部分はさらに著者のコメントが加えられており、ときに繁雑のきらいがないではないが、おおむね納得できるものであって、論の展開に厚みを与えているといつてよかろう。

著者は、人類学、心理学、歴史そして文学を作品分析に援用するにあたり、どのようなことを念頭に置いているであろうか。原文を引いてみると次のようである。

Anthropology concerns itself primarily with the origins and purposes of the incest taboo,...(p. 1)

While anthropologists concern themselves primarily with the matter of the taboo, psychologists tend to focus on the way incest functions in particular cases, on the questions of why it occurs and how it affects the people involved. (p. 3)

While anthropology concerns itself primarily with the origins and ends of the incest taboo and psychology with clinical studies of incest offenders, history looks at the incidence of incest within the context of world events....history records the efforts of man to evade, to ignore, to challenge, and to manipulate the taboo, and it notes also the instances in which the incest ban has dictated to man and to events (p. 5)

In its treatment of incest, literature in a sense incorporates the approaches of all three of the other disciplines under discussion. Like the psychologist, the writer of fiction is concerned with the working

of the mind and heart of a particular person; like the anthropologist, he is interested in the theoretical implications that incest holds; and like the historian he sees a particular act of incest expanded and enlarged by its relation to the figures and events of other times and places. (p. 8)

これらの引用によって、われわれは、著者の狙いは、人類学、心理学、歴史、文学を用いてフォークナーの作品を近親相姦の主題に関して分析することにあるのではなく、人類学、心理学、歴史の三者の総体としての文学における近親相姦の態様を概観し、その関連でフォークナーについてみようということに置かれていることを知る。じっさい、本文の論の展開にあたっては、いずれの作品についても、他の文学作品との比較検討に頁数の大部分が割かれている。その際著者がもっとも注目するのは John Milton の *Paradise Lost* と Thomas Mann の *Death in Venice* であって、とりわけ前者に対する強い関心が顕著である。

著者によれば、フォークナー論において Milton との関連を中心テーマとして取り上げているものはほとんどなく、今迄のところ、論文はわずか一つしかないということであるし、Michael Millgate, Richard Adams, Cleanth Brooks 等 Faulknerian を 8 人ほど挙げたうえで、彼らの評論には Milton の作品との類似性を指摘している個所があるものの、*Paradise Lost* との関連をかなり詳しく論じたものは David Aiken の *The Sound and the Fury* 論ただ一つであるとし、In a listing such as this, the comments may seem numerous, but they shrink in significance when regarded in the context of the Faulkner industry's enormous output (p. 12)

と不満を述べている。Thomas Mann の影響については *Flags in the Dust* を論じた章でとくに言及されているが、それによれば、この作品と Mann の作品、とくに *Death in Venice* との関係については未だ明らかにされてはいないものの、フォークナーの所蔵図書中に Mann の作品があるし、彼が長野のセミナーのために来日した折のインタビューで、とくに *Death in Venice* に言及しており、また、いろいろの機会に、Mann が偉大な作家であると発言している、といった事柄を考え合わせるならば、*Flags in the Dust* と *Death in Venice* の関連性を云々することは十分可能であると述べ、前者における Horace と Narcissa、後者における Aschenbach と Tadzio との間の類似性を詳細に比較検討している。

A Metaphor for the Fall というサブタイトルが本書に付けられているとおり、著者の主たる目的は、フォークナーの諸作品における近親相姦の諸相、とくに兄妹相姦という、著者の言葉を借りていえば sibling incest が、つきつめてみると、いかにアダムとイヴの犯した原罪に到るかを、できる限り詳細に検討することにあり、このための主たる対象として選ばれているのが *The Sound and the Fury* と *Absalom, Absalom!* である。この二つの作品における sibling incest への言及ないし暗示を指摘することは、従来フォークナー論の中でしばしば行なわれていることであり、そのこと自体はべつにとりたてているほどのことではないが、類書と異なる本書の独自性は、これをもっぱら Milton の *Paradise Lost* に関連させて綿密に分析している点にあり、論述の中心は、人間の原罪とこれら二作品にみられる sibling incest との関連性を明らかにすることに置かれている。*Paradise Lost* といえ、サブタイトルにある

the Fall とのかかわりではまさに格好の材料である。もし、著者が the Fall との関連で都合が良いからという理由で *Paradise Lost* を用いているのであれば、安易のそしりを免れ得ないが、本書においては、作品中の具体的な場面が数多くとり上げられ、それらの *Paradise Lost* との関連性が詳細に述べられており、全体として綿密かつ慎重な姿勢が貫かれているので、著者の論のすすめかたには十分首肯できる。また、二つの作品に登場する人物について彼らの近親相姦的關係を考察するにあたっては、このような関係が生じやすい性格類型や家庭環境の特色が挙げられている。すなわち、性格としては、孤独、抑圧、疎外、内向等、環境としては、閉鎖性、排他性等である。そうした特色がいかによく *The Sound and the Fury* と *Absalom, Absalom!* の作中人物にあてはまるかということが、作者の出身地であるアメリカ深南部 (Deep South) という、閉鎖的、保守的そして排他的な地域を背景にして述べられている。そして、彼らの近親相姦的關係から生ずるさまじまの出来事やそれらが他に波及して起る種々の事件が、いかに the Fall に結びつくかという点に関しては、結論を急ぐあまりやや性急にすぎる部分もあるが、大方は読者を納得させるにたるすぐれた論考である。ただ、本書においてフォークナーの処女作のスペリングが一箇所 (p. 12) *Soldiers' Pay* となっているのみで、Bibliography を含め他はすべて *Soldier's Pay* と単数所有格になっているのがいかなる根拠に拠るのか疑問として残る。

Constance Hill Hall: *Incset in Faulkner—A Metaphor for the Fall*
Studies in Modern Literature, No. 55
UMI Research Press, Ann Arbor, Michigan 1986